

近くて近いアジア

朝日新聞社会部編

学陽書房 B6判 二二五頁

一、三〇〇円

我々の日常生活をじっくりと見回してみるとアジアからの「物」がさまざまなところへ入り込んでいくのに気付く。NIES製の電化製品や衣料品はもとより、食べ物にしてもバナナはフィリピンから来ているし、エビは中国・インド・インドネシアから入って来るし、ファミリーストランで食べる鳥肉がタイから来たものであることもあるし、飲み屋で出される枝豆は台湾で作られたものかもしれない。このように毎日アジアからの食べ物を口にしているはずである。国産品と思っていたものが実はアジアからの物であったということがよくある。我々は自分たちの知らないうちにア

ジアからの「物」をすでに受け入れていく。そしてそれなしでは我々日本人の日常生活は成り立たないところまで来ている。とにどれだけの人が気付いているだろうか。そして逆に日本ではいらないもの使われなくなった物はアジアへ流れて行く。例えば、フィリピンのマニラでは日本で廃車になった自動車をそのまま運んできてタクシーとして使っていたし、タイのバンコクの街の中を走っているサムロと呼ばれる庶民の乗り物は、昔の日本で走っていたダイハツミゼットを改造したものである。タイのチャオプラヤー川を走る船のエンジンは日本のトラックの中古エンジンであるという具合に、

このようにアジアと日本とは経済的に深く結び付いており、日本の経済発展はアジアを抜きにしては語れないのではない。しかし我々のアジアに対する意識は「貧しい・汚ない・遅れている」といった程度しか持ち合わせていないのが実情である。

この本ではアジアからの外国人労働者、出稼ぎ女性、農村の花嫁、留学生・就学生等のさまざまな問題を取り上げることにより、日本人及び日本社会の問題点を浮かび上がらせている。日本社会の閉鎖性・排他性であるとか、過去の歴史に対する反省のなさから生じる偏見や差別があり、さらに人権感覚の欠如である。

日本の経済発展に伴う円高と賃金格差がアジアの人々を日本に引き寄せる原因となっている。アジアからの「物」は受け入れられるが、「人」は受け入れられないという自分にとって都合の良いことはこれからの国際社会においてはもはや許されなくなるのではないだろうか。アジアとの関わりの中でつきつけられた日本社会と日本人の問題点を

対して、我々日本人が外国人と共に生きてゆくにはどうしたらよいか、日本の社会が外国人にとっても住みやすい開かれた社会になるためにはどうしたらよいかについて行政が、そして個人個人が真剣に考えてゆかねばならないと思う。もちろん言語・文化・習慣・物の考え方が異なる外国人と共に生きていくとなると、多くの摩擦・苦勞を伴うことは明らかであるが、国際化社会を目指すのであるならば避けては通れないことである。異なるものに対して同化を迫ったり、あるいは排除するのではなく、多様性を認めることが日本の社会が幅の広い足腰の強いものとなるために必要ではないか。外国人を受け入れるにあたり、法律はもとより、住居・医療・教育・福祉等の社会制度の整備はもちろん必要なことではあるが、それと共に意識の改革が重要となってくる。単に目先の経済的利益によって外国人労働者を受け入れるとなると失敗することは明らかである。

世界各地で貧しい国から豊かな国へと人がおしよせている。

このような国際的な労働力の移動の背景には南北問題があり、これを解決しない限り、外国人の出稼ぎ労働者の問題はなくならないだろう。誰だって好き好んでわざわざ外国へ仕事をしに行くのではなく、自分の国では仕事がなく、生活ができないからこそ外国へ行くのであるから。歴史を振り返ってみれば日本も貧しかった時、外国へ人を送り出していた。そして豊かになった今こそ外国人を受け入れる時期であるし、それが先進国として国際社会で果たす役割の一つであると思う。

△戸塚区 山本 忍▽